

雲南の生態資源

—少数民族の生活基盤としての山・森・川の資源利用—

2007年4月21日 雲南懇話会

山田 勇

はじめに

京都大学東南アジア研究センターの研究者達が雲南に関心をもちはじめたのは1970年代の後半であった。それまで東南アジア地域に集中していた研究者が、国境や地域のしぼりにとらわれることなく、より自由に、より大局的に東南アジアを見直すと、当然、中国の南方域がひっかかってくる。雲南へいく前に、すでに中国の南は東南アジアと同質であるという認識は生まれていたのである。

また、中尾佐助らの照葉樹林文化論等も気になっていた。アジアを中心にした文化的要素のおもしろさと、自然誌的多様性は、南は熱帯雨林、北では、雲南がひとつの中心であると私自身もはやくから考えていた。

1978年に雲南研究会を立ち上げ、渡部忠世を中心に何回かの研究会がもたれたが、私は1980年から農林水産省へ出向したため、その後10年ばかりの空白があった。

1990年、東南アジア研究センターははじめての中国調査を企画した。当初は桜井由躬雄が農業発展の歴史の変遷過程を調査しようという計画を立てたが、東大へ転出したため、古川久雄がリーダーとなって、2年間にわたって、中国全土を車で走破するという計画を実行した。初年度は長江から南、次年度は長江から北ということで、上海社会科学院をカウンターパートにし、マイクロバスを寄付して、数万キロの行程を調査した。初年度の後半に、東海岸から、広西、貴州をへて、雲南へ入ったのが、はじめての雲南行である。1990年晩秋の頃であった。

これをきっかけに中国調査がつづき、ほぼ毎年のように雲南を調査し、現在に至るまではほぼ全域を調査することができた。その後、調査地域はさらにひろがり、ヒマラヤを中心にすえた環ヒマラヤ広域圏調査を企画し、雲南の北をめぐることになった。パミール高原も視野に入れて、さらに広い視点からの地域像を現在、模索中である。

今回は、これらの中で、生態資源という観点から、特に印象に残っている地域をとりあげてみたい。

1. 北西部怒河上流域

ほぼ四角い形の雲南の北西部分は怒河、瀾滄江、金沙江が並流する大峡谷地帯である。この怒河にそって、南の高リ貢山から独竜に至るあたりを数度にわたり調査した。崖の上に住むリス族の人々の生活、樺の木の伐出、とざされた独竜への道など、雲南で最も迫力に

みちているのがこの地域である。最近、世界遺産に登録され、また独竜への道もできたようであるので、今ではアプローチも楽になっている可能性がある。近いうちにもう一度訪れて、高地に住む人々の生活がいかに変化してきたかを比較したいと考えている。

2. シャングリラから徳欽のチベット域

大理から麗河をぬけ、シャングリラを通して徳欽へ至る道は、雲南チベットの道である。チベットでの伐採が禁止されて以来、この地域の生態資源は、日本へ輸出するマツタケである。また美しい雪山景観を背景にしたエコツーリズムも盛んになりつつある。このルートをぬけてチベットへ入るルートは昔は外国人はいけなかったが、今はいけるようになっていて、雲南エコツーリズムのひとつの拠点となっている。

3. 峰岩洞

雲南の東南部分には石灰岩地帯がひろがる。このあたりの景観は、桂林にまさるともおとらない。その中に、大きな洞窟の中に住む人々がいた。100年近く、数百人の人々が洞窟に屋根なしの家をたて生活を営んでいた。このレポートは、すでに出版されているが、大へん考えさせられる場であった。この調査の数年後、NHKが取材にいったが、すべての住民が外へでたそうである。一説によると、今の時代に洞窟に住んでいるのは格好悪いからと上からのお達しにより追い出されたらしい。世界遺産に指定してもおかしくない場であっただけに残念である。

4. 生態文化村

石灰岩地帯のやや南方に、生態文化村がある。これは、数百年の歴史のある村落が、自分達のほこるべき文化遺産と、周辺のすぐれた景観を残そうと、自主的に動きはじめ、歌、踊り、民話、農耕技術などを、小ミュージアムに保全し、かつ、まわりの自然景観を昔のままの状態に残そうというものである。現在、雲南に5ヶ所あり、他省にもひろがりつつある運動である。何よりもユニークな点は、トップダウンではなく、村民自らがいい出し、実行している草の根の動きという点である。

5. 紅河の棚田

アジアの水田文化圏には、数々のすぐれた棚田の景観がある。日本にも各地に小型だがよくととのった棚田が最近好まれてよく話題になる。東南アジアでは、フィリピンのイフガオ、ジャワやバリの棚田があるが、中国のそれは群をぬいて大きく美しい。とりわけ雲南の中央部を斜め下る紅河流域の阮陽周辺の棚田は、文句なしに世界一である。

6. 雲南の南

雲南の南は、まさに東南アジアである。はじめて、この地を訪れた時、明るくひろがる広

い水田や国境のゴム林をみて、われわれ東南アジア研究者は故里へ帰ったような喜びを感じた。1990年には、車で昆明から2日かけて難路を走ったが、今では1日10数回の飛行機が北と連絡している。中国の人にとってもこの一帯は別世界であり、東南アジア大陸山地部と同様の文化生態景観をみることができる。

7. 東北部の斜面畑

西北部が崖の上にくらす人々の生活圏であるとすれば、この地域は、大斜面を耕作する人々の生活圏である。特に3月にこのあたりを走ると斜面全体に菜の花が咲き乱れ、桃源郷的景観がひろがる。ここを北へぬけると四川省に入る。

この四川省から昆明へとぶと、厚い雲がきれ、雲南という地名の由来を身をもって感じるすることができる。

8. 雲南の未来

ここ20年弱の雲南との付き合いの中でも、この地域は大きくかわった。飛行機と高速道路網とで、これまで何日もかかった奥地へも、一日でいけるようになった。そして人々の生活がなによりもかわった。花博の時には多くの古民家がこわされ、新しいマンション、ホテルと広い道路が建設された。東海岸域から人々はこの地を求めてやってくる。生態旅コウという言葉にピッタリの地域がこの雲南である。

熱帯から雪山までの幅広い高度差の中にひろがる迫力満点の急流、崖、大斜面、棚田、50近い少数民族の人々の生活、多様な生態資源など、おそらく、世界で少数民族とよばれる人々がもっとも生々しているのが、この地域ではないだろうか。多様な生態系の中で、まさに環境と調和してくらしている人々の生活は、今後の世界のあり方へのひとつの大きなヒントになるであろう。これだけの面積の中にこれだけ密な生態文化複合系がみられることは特筆すべきことである。

参考文献

山田勇（編）（1997）：雲南およびその周辺、東南アジア研究 35（2）、pp309-596.

山田勇（1997）：石灰岩地帯に暮らす人々－雲南東南部の生態文化複合系の変容過程、東南アジア研究 35（2）、pp511-524.

山田勇（1998）：雲南の石灰岩地帯の人と環境、遺伝 52-3、pp59-62.

山田勇（2000）：アジア・アメリカ生態資源紀行、岩波書店.

山田勇（2006）：世界森林報告、岩波新書.